

## 次元上昇（アセンション）に備えて

井上 勉

次元上昇とは、地球上のすべてのものが現在の波動レベル、意識レベルからより高いレベルに上昇することである。それが起こるのは次のことによってであると広くいわれている。すなわち天の川銀河の中心のプレヤデス星団が動く方向に対して巨大なフォトン・ベルトが直交しており、そのフォトン・ベルトの中にわれわれの太陽系が入り、地球がそのフォトン・ベルトに充滿している強いエネルギーに晒されることによってである。そのことによって地球上のあらゆるものが根本的变化を経験するという。その根本的变化とは要するにあらゆるエネルギー形態の波動上昇と意識レベルの上昇である。

われわれの太陽系はそのフォトン・ベルトを約 13,000 年の周期で出入りしているという。とすれば、次元上昇は過去に何度も起こっているということになる。そして現在われわれが地球の 3 次元世界に生きているということは、転生を前提すれば、われわれが過去において次元上昇に何度か失敗していることを意味している。もし過去においてそれに成功したのなら、われわれは今ももう 3 次元世界より高次の世界にいるはずである。

われわれはこれまで住んできたこの 3 次元世界をどう感じているだろうか。われわれはこの世界以外の世界を望まないほど、この 3 次元世界に満足しているだろうか。多くの人々はこういう世界はもう充分、もうたくさんだと思ひ、もっと自由な、争いのない世界に住みたいと望んでいるのではないだろうか。そういう人々は、次元上昇して移行する先の世界がそういう理想的な世界だとして、次元上昇を成し遂げたいと思うだろう。では、過去の失敗を繰り返さないためにはどうしたら良いか。

### メルキゼデクの語ること

ここでドルンヴァロ・メルキゼデクが語っていることが参考になる<sup>1</sup>。彼は 1972 年に成人した肉体の中に「入ってきた(walked into)」<sup>2</sup>という。彼は多くの生涯と意識の諸次元を一貫する完全な記憶を保持している。彼がこの時期に 3 次元世界に入ってきた主な目的は、地球人が円滑に次元上昇を果たすのを助けるためである。

その彼がこう語る。「歳差運動において、この変化が起こる地点へとわれわれが近づいていくと、すべてのものが崩壊する。すべての社会構造などが解体し、崩壊する。」それを引き起こすのは地磁気の崩壊であると彼はいう。地磁気崩壊はまた地軸の変動を引き起こすともいう。ここで「この変化」とは次元上昇のことである。

歳差運動がある地点に近づくとあらゆる物事がバランスを失いはじめるとメルキゼデクはいう。われわれがここで参照している資料は彼のある講義の記録であるようで、その講義の中で彼は黒板が何かに図を書いて聴衆に説明しているようなのだが、記録の中では「ある地点」とか「この変化が起こる地点」というのが歳差運動のどの地点であるのか、示されていない。たぶんその「地点」とは現在の歳差運動周期の終わりのことであろう。現在の歳差運動周期は 2012 年の冬至の日に終る。

さて、歳差運動が周期の終わりに近づくと、突然地球の磁場が大きく変動し、波打ちはじめる。その期間は非常に短く、通常 3 ヶ月から 6 ヶ月である。このとき地球の全構造が崩壊する。磁場は地球組成の液体的なものを固体的なものにする役割を果たしているのだが、磁場が崩壊すると固体的なものが液

<sup>1</sup> 次を参照。http://www.2012.com.au/Site.A.html. このページの下の方にあるリンクのうち、' 4th dimension ' および ' The Near Future ' をクリック。

<sup>2</sup> <walk into(in)>とは、霊的存在が肉体において生きている人間の魂と交渉して、その魂と交代してその肉体に入ること。

体的になり、滑りやすくなる。あらゆる物がバランスを失い、それによりあらゆるものがばらばらになって崩れる。磁場は早い場合には3日半で完全に消滅する。

意識の次元上昇 意識の次元上昇と地軸変動は通常同時である に先立つ5、6時間前から3次元と4次元の接触が始まる。人は4次元意識へと移行し、3次元意識は薄らぎはじめる。このとき地球の自然的状態においては存在しない物質でできたものは消えはじめる。このことが起こりはじめたら人工的な構築物から出て、自然のままの場所に留まるべきである。

3次元と4次元の接触が起こると、4次元世界の事物が3次元世界に出現するかもしれない。それらの事物は3次元世界のどこにもないような色をしており、それを見てぎょっとさせられるだろう。4次元への移行は徐々に行われることが望ましいゆえ、そうした事物に触れてはいけない。もし触れると即座に、そして完全に4次元に引き込まれてしまう。それらを見つめてもいけない。もし見つめると、まるで催眠術にかけられたようになって急速に4次元に引き込まれてしまう。

磁場が崩壊するとまもなく視界が消え、人は自分が暗黒の空無の中にいるのに気づく。このとき3次元の地球はその人にとってはもう消え失せてしまっている。こうした出来事が起こっている間、たいいてい人は眠り込み、夢を見はじめる。夢を見ている状態は3日から4日続く。

他方、目覚めていることができれば人は文字通り4次元への一種の誕生過程を経験することになる。その経験は新しいものであるように思われるかもしれないが、しかし実際は非常に古くからあるものだ。人はこうしたことを以前に経験しているのである。

4次元世界が知覚されるようになると光が再び戻ってくる。人は自分が今までに見たこともない世界にいるのに気づく。実際は以前にそうした世界を見たことがあるのだが、以前に何度もその記憶が消されているので思い出すことはできないだろう。そこは全く新しい場所のように感じられる。

4次元世界に入ったいま、体の形は以前とまったく同じであるが、体の原子構造は劇的に変わってしまっている。以前の濃密な身体はエネルギー的なものに変換されてしまっている。

4次元世界ではすべてのものが一瞬一瞬自らの想念と感情によって創造される。4次元世界に入ったときに否定的なことを想い、恐れが生じると、3次元世界に投げ返されてしまう。だから3次元と4次元が接触し始めた最初の数時間の間と4次元意識に移行していく間に内部の平和を保つことが非常に重要である。積極的なことを想えばそれが顕れる。「愛」「真理」「美」「平和」「調和」といったことを想うと、それが生起する。そうした積極的なことを想い、感じることによって新しい現実の中での存在が安定したものになる。

思ったことがそのまま生じることに気づくと、人は自分の外観を心に描いた理想的な像に合うように変えはじめる。身体構造の改造は4次元レベル以上の世界では自然に起こることである。

4次元世界に入っていくと、そこに二人の存在が立っているのを目にする。それは自らの母と父である。彼らの体は非常に大きく、3メートルから4.8メートルの高さがあるだろう。この二人の存在と自分との間には或る絆があり、彼らは人がこの世界で自分の力でやっていけるまでの最初の2年間、導き守ってくれる者である。4次元世界ではこの世界に入ってきたときの大きさ・状態から大人のそれに移行するまで約2年かかる。

以上がメルキゼデクの語ることのうち、ここで紹介したい部分である。

### 地磁気変動

メルキゼデクのいうことが正しいとしたら、地磁気崩壊、地軸変動と意識の次元上昇は同時に起こる。そうすると地磁気は現在どういう状態であるか、近い将来それがどうなるかということが気になる。

地磁気の強さは長期間に亘って変動している。元コペンハーゲン大学理学部教授 P.V.シャーマが作成した過去9,000年間の地磁気変化の図は次のことを示している。すなわち、紀元前7000年頃は磁気が強く、その後磁気が次第に低下し、紀元前3500年から3000年頃に大きく低下した。それから地磁気が回復し、紀元500年頃に最大値をつけ、その後また低下してきた。現在、地磁気は0.5 Gauss程度であり、最近までの100年間で5%の低下を示しているが、現在では低下率が10%にまで高まっている。そ

してこうした低下傾向が続くとすると、いずれ地磁気はゼロになるはずだが、ある意見ではそれは 1,200 年ほどのちのことであり<sup>3</sup>、また別の研究では 1,000 年以内にそうなる<sup>4</sup>。

しかしもっと早く地磁気がゼロになるという予測もある。地磁気の研究を続けてノーベル賞を受けたアメリカの地球物理学者 J.M.ハーウッド博士と S.マリン博士はこのままの減少率でいくと 2030 年頃にそうなると予測しているそうである<sup>5</sup>。あるいは、インドのコンピュータ科学者はその時期をもっと早く予測しており、2012 年に地球と太陽で磁極が逆転すると同時に地磁気がゼロになるとしている<sup>6</sup>。

他方しかしそれとは反対に、東京工業大学の本蔵義守教授たちのグループは、減少している地磁気はやがて増加に転じるとする研究結果を報告している<sup>7</sup>。このように地磁気を増減については諸研究の結果が一致していないが、次の西澤徹彦の説は傾聴すべきものに感じられる。すなわち、彼は現在の地磁気の減少率がこのままのペースで推移するという保証は無く、突如何の前触れも無く地磁気が落ち込むことも考えられるという。この地磁気の落ち込みの要因として彼は過去 50 年余りの間に行われた 2,050 回以上もの核実験を指摘している。核爆発による衝撃波は地球の内核に達し、その傾斜を揺さぶり、内核と外核との摩擦によって生じた膨大なエネルギーが下部マントルを高熱状態に導く。磁気を帯びたこの部分の岩石は高熱によって磁性を失い、そのようにして地球の磁場が急激に落ち込むことが考えられるというのである<sup>8</sup>。

ここであるチャネリング情報を参照してみたい<sup>9</sup>。多くの地球上の生を経験し、聖書外典「トピト書」にその名が記されている存在は、現在天界の「クリムゾン・カウンシル」の一員である。その存在すなわちトピアスによれば、地磁気は 10 年前や 20 年前とは比較にならないほど減少している。しかしそれはまた増大するときもあるという。地磁気に限らず、地球の重力的引力、シューマン共振など地球のすべてのエネルギーは予測がつかないほどの流動的狀態にあると彼はいう。そして実はこれら地球のエネルギー的要因のこれまでの状態は地球人が意識を 3 次元に合わせる助けをしてきたのだが、それらがいま変動していることと地球人の意識の変化は呼応しており、それら地球のエネルギー要因の「調整」、「グリッド・ワーク」が完成すると、そのことは地球人が二元性を手放すことを可能にすると彼はいう。二元性を放棄するということは 3 次元意識から解放されること、意識の次元上昇を果たすことである (1999.12.11; 2002.3.2; 2002.6.1; 2004.6.5 のチャネリング (「シャウド」) 参照。以下、チャネリングが行われた日付のみ記す)

#### 次元上昇へ向かって

さて、Nature 誌や New Scientist 誌に発表されたある古地磁気の研究は、紀元前 10400 年に地磁気の消失があったことを確認しているそうである<sup>10</sup>。この頃はアトランティスが海底に沈んだといわれている時期に近い。そしてこの時期はまたわれわれの太陽系が前回フォトン・ベルトに入った時期とも重なる。そうするとフォトン・ベルトへの進入、地磁気消滅、大規模な地殻変動、これらの三つは関連しているということなのだろうか。フォトン・ベルトへの進入が地磁気を消滅させ、それによって大陸の沈降・隆起を伴うような大規模な地殻変動が起こるのだろうか。

現在われわれの太陽系が再びフォトン・ベルトに入りつつあるといわれている。とすると、われわれの太陽系はいままさに銀河の中心から発する高エネルギーに晒されているはずである。たぶんフォト

3 次を参照。 [http://www22.ocn.ne.jp/~p-inpaku/flood/j\\_index.htm](http://www22.ocn.ne.jp/~p-inpaku/flood/j_index.htm).

4 次を参照。 <http://kagi.coe21.kyoto-u.ac.jp/kagi/jp/tidbit/tidbit06.htm>.

5 次を参照。 [http://www.jikuu.co.jp/kobetu/sai\\_photon.htm](http://www.jikuu.co.jp/kobetu/sai_photon.htm).

6 次を参照。 <http://www.indiadaily.com/editorial/1753.asp>.

7 次を参照。 <http://www.titech.ac.jp/tokyo-tech-in-the-news/j/archives/2005/07/1121385600.html>.

8 次を参照。 <http://www5b.biglobe.ne.jp/~nshzwtc/sub-p2.htm>.

9 次を参照。 <http://crimsoncircle.jp/home.html> (日本語) <http://crimsoncircle.com/home.htm> (英語)

10 注 2 参照。

ン・ベルトというものの前提なしに研究を行っているロシア人科学者グループは、地球とわれわれの太陽系における種々の観測結果から、われわれの太陽系はこれまでより一段と高いエネルギー領域に進入しつつあるという結論を導き出している<sup>11</sup>。また、ジョンズ・ホプキンス大学の地球物理学者ピーター・オルソン博士は地球の磁場が弱まっている要因は太陽放射だと指摘しており、さらに核とマントルの間で何か起こっており、それがプレート・テクトニクス、深層マントル・プリューム、地磁気に影響を与えていると述べている<sup>12</sup>。他方、宇宙物理学者ポール・ラヴィオレッテ博士はわれわれが間もなく天の川銀河の中心から発せられるエネルギーに直面するだろうと示唆し、そのこととマヤ暦とを関連づけている<sup>13</sup>。マヤ暦は2012年の冬至に終わりを迎える。それ以後の暦はもうないのである。このことはこのときに現在の世界が終ることを意味しているのだそうである。現在の世界が終わるといえるのはどういうことだろうか。人類が新しい世界に移行するということなのか。

いま再びわれわれの太陽系がフォトン・ベルトに入りつつあることによって地磁気が急速に減少し、近い将来消滅し、それと関連して大規模な地殻変動が起きるのだろうか<sup>14</sup>。メルキゼデクのいうところにしたがえば、そのとき、つまり地磁気崩壊とともに次元上昇が起こるのである。

約13,000年毎のフォトン・ベルトへの進入時期、この期間の2倍の期間と一致する歳差運動周期の終わり、そして歳差運動周期の終わりと一致するマヤ暦の終るとき、すなわち2012年の冬至の日きっかけに地磁気がゼロになり、次元上昇が一晚のうちに起こるというのではないだろう。次元上昇はその日が近づいた時期の中のどこかの時点で起こるのだらうと思われる。その時期の幅として10年くらいは長い周期の中では充分考えられるはずである。メルキゼデクは地磁気崩壊、意識の次元上昇は1998年の秋頃に起こるようだと語ったが、その日以降、それはまだ起こっていない。

ここで再びトバイアスの語ることを参照したい。それによれば、大昔から2012年の末に起こると予測されてきたことは意識の量子的跳躍(quantum leap in consciousness)のことであるが、その日付は固定的に考えられるべきものではなく、言われているよりも早まる可能性があり、トバイアスの見るところ、それは2007年9月18日に起こるようである。しかしまた、その量子的跳躍をこの日より後に、あるいはその日よりさらに早くもたらす出来事があるかもしれないとトバイアスはいう。とにかくその日が2007年9月18日だとして、その日に何か外面的に目に見える変わったことが起こるのではないと彼はいう。変化は表面に現れる前に先ず深いところで起こる。しかしその日以降、すべてが劇的に変化しはじめるという。物理的現象も急速に変化しはじめる(2002.12.1; 2003.8.2; 2003.10.4; 2004.6.5)。

---

<sup>11</sup> 次を参照。 [http://www.2012.com.au/Planets\\_changing.html](http://www.2012.com.au/Planets_changing.html)

<sup>12</sup> 次を参照。 [http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article\\_11810.php](http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article_11810.php)

<sup>13</sup> 次を参照。 [http://www.2012.com.au/Galactic\\_Superwave.html](http://www.2012.com.au/Galactic_Superwave.html)。ラヴィオレッテは2004年12月27日や2005年1月に観測されたような強烈なガンマ線爆発は約26,000年の周期で銀河の中心から発せられる「スーパーウェーブ」の前触れではないかと示唆している。そして前者の爆発と、これのほんの少し前に発生したスマトラ島沖地震という二つのことが続けて起こったことは偶然ではないと考える。彼は26日の震度9.3の地震と過去25年間に観察されたものより100倍も明るい27日のガンマ線爆発という第1級のイベントがそういう短い間隔で偶然に起こる確率は5千分の1であるとしている。また、トバイアスも現在太陽が途方もないエネルギーを噴出しており、それが地球に向かって突進してきていると語っている(2003.11.1)。さらに、USA大気研究センターの2006年3月6日発表のニュースによると、現在静穏期にある太陽活動が早ければ2007年後半から活発化し、2012年に極大期を迎え、放出されるエネルギーは前回より30%から50%増大するだろうという。次を参照。

<http://www.ucar.edu/news/releases/2006/sunspot.shtml>

<sup>14</sup> トバイアスはアトランティスが再び浮上しつつあると述べているが、しかし「(自分たちは)地球をいま沈めようとはしていない」とも述べている(2004.10.2; 2005.9.3)。ちなみに、メソアメリカのマヤ族長老カルロス・バリオスも大西洋で古代アトランティス大陸の一部が浮上しつつあると述べている。次を参照。 [http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article\\_12125.php](http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article_12125.php); [http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article\\_12219.php](http://www.earthchangestv.com/artman/publish/article_12219.php)

このようにトバイアスは2007年9月18日の日付を指摘しているが、一方、西園寺昌美は2007年5月20日に富士聖地でされる行事を境に地球は新たによみがえり、新星として誕生するという<sup>15</sup>。この言葉は、彼女が他の色々な箇所で語っていることから判断して、次元上昇を指していると考えられる。

#### 次元上昇に備えて

西園寺やトバイアスのいうことが正しいとするなら、地球人の次元上昇のときまで 現在が2006年4月として あと1年余り、あるいは1年半である<sup>16</sup>。間近に迫ってきた次元上昇に備えて、今度こそそれに成功するために準備や心構えを整えなければならない。ここで初めに紹介したメルキゼデクの語ることが大いに参考になる。彼のいっていることが正しいとしたら、次元上昇が始まったと判る目に見える現象が現れる。すなわち人工的な素材でできた事物が視界から消えていく。このことが起こればいよいよ次元上昇が始まったと判る。あるいはまた、いままで見たことも無いような色彩のものが3次元世界に現れてきたら、やはり次元上昇が始まったという徴である。こうなったら、することはもうただ一つ、恐怖や否定的想念が心に生じるのを排除し、ひたすら積極的なことを想うことのみである。われわれがいま3次元世界にいるということは、メルキゼデクがやっているように、われわれが過去に何度も次元上昇に失敗してきたということの意味している。過去に次元上昇の大波がやってきたとき、われわれは恐怖や不安に襲われて3次元世界に投げ戻されたのであろう。今回こそはそうならないために、そのときが来たら恐怖心を持たず、積極的なことのみを想うべきである。しかしそういう想念の習慣が身につけていなければ、そのときになって急にそんなことができるものではない。否定的なことを想わず、積極的なことのみを想うという想念活動の訓練を残り少ない期間、徹底的にやる必要がある。

このことについて以下、具体的に少し述べてみたい。まず、どんなことが起こっても絶対大丈夫、絶対うまくいく、絶対困ったことにはならないという想念の習慣を自分の心の中に確立すべきである。たとえばある役割を自分が果たさなければならないとする。自信が無い。心臓がどきどきする。そういうことが自分にあるとすれば、その都度、絶対大丈夫、絶対うまくやり遂げるということを自分自身に言い聞かせるのである。不安が自分の心に生じるたびに絶対大丈夫と自分に宣言する。これを何度も何度も繰り返して実行する。そうしているとやがてほんの少し不安な気持ちが出たときでも直ぐに絶対大丈夫という想念が出てくるようになる。たとえば地震が発生したときでも、絶対大丈夫という想念が最初に出てきたらしめたものである。

さらに、メルキゼデクがやっているように、次元上昇のときには積極的なことを想うことが極めて大事である。彼はそのときには「愛」、「真理」、「美」、「平和」、「調和」などといった積極的なことを想うのが良いといっている。そのときにそうできるように今から訓練しておかなければならない。上で挙げた例でいえば、自分が何かある具体的な状況に面したとき、これは自信がないな、と想ったら、すぐさま自分に向かって「自信」と言い聞かせるのである。あるいは、自分には能力が欠けているのではないかと想ったら、そのときすぐに「能力」と自分に言い聞かせることをする。次元上昇のときは未知の中に跳び込むのだから、いまいったようにして特に勇氣と大胆さを養っておくべきであろう。そしてその自信や能力や勇氣などは3次元的世界にあるようなあやふやな自信や能力や勇氣などではなく、根源的世界に根拠をもつものであるべきである。そこで「無限なる自信」、「無限なる能力」などと自分に宣言するのである。それが自分にはあるのだと自分に向かって宣言するのである。

なぜなら、多くの神秘的伝統あるいは神智学などの神秘学がやっているように、人間の本质は大宇

---

<sup>15</sup> 西園寺昌美「輪廻の世界を超えて」および「神人たちの幕開け」『白光』白光真宏会出版本部 2005年12月号20-22頁および2006年1月号22-25頁参照。

<sup>16</sup> ただし、たとえば2007年中というような短時日のうちに次元上昇や二つの地球への分離(後述)が完了するのではないだろう。小松英星は「2007、8年頃までにはマス・アセンションが起動する」だろうといっているが(<http://www21.0038.net/~gaia-as1/>「アセンション・オンゴーイング」第6回参照)、2007年5月あるいは9月に大きく次元上昇へ動き出すということなのだろう。

宙世界の創造主から発しているものだからである。宇宙創造主(宇宙神)は愛、真理、美、平和、調和、その他ありとあらゆる属性を有し、その属性は限りなきものである。だから人間は本来宇宙神の無限なるすべての属性を持っている。「絶対なる自信」、「限りなき自信」、「絶対なる能力」、「無限なる能力」、その他すべての無限なる積極的な属性を本来持っている。そういう本来の絶対的事実を宣言するのであるから、宣言は力強くなり、心の訓練における効果が大きい。日頃から具体的な場面でそうした積極的なコトバを倦まず弛まず自分と宇宙に向かって宣言して、とっさのときにそのコトバが口から出てくるまで繰り返し練習するのが良い。

さらに進めていえば、自分が宇宙創造主と本質においては一体であることを自分と宇宙に向かって宣言することもしたら良い。「我即神也(ワレソクカミナリ)」<sup>17</sup>はそのことを端的に、かつ強力に表現している。この強力かつ端的なコトバを常に常に自分に向かって、そして宇宙に向かって宣言し続けるのである。次元上昇のときには想うことがそのまま現実になるというのだから、「我即神也」とそのときに唱えたり想ったりすれば、次元上昇は完璧に成功するはずである。あとでトバイアスの所説を紹介するときに見るように、人間は次元上昇して神意識に戻るのである。その次元上昇を半ば先取りするようなことをしていれば本番のときはきつとうまくいく。そこで、「我即神也」ということをたとえば次のように具体的に表現して宣言するのが良いだろう。すなわち自分と宇宙に向かってこう宣言するのである。「我即神也。私は宇宙神の中で、宇宙神と俱に生きている。私の命は残る限なく宇宙神の命である。私は永遠の命、無限なる光である。私は宇宙神とともにある神である。」このように宣言し、さらに「我即神也」の印(いん)を継続的に組めばさらに良い<sup>18</sup>。

#### トバイアスの語ること

以上、次元上昇に備えてどういう準備をしたら良いか、メルキゼデクのいっていることを参照し、少し敷衍して述べてみたのだが、ここでトバイアスが次元上昇に関して語っていることを短く紹介したい。

次元上昇のときが来たら、そのときは何も頭脳的に理解しようとせず、ただそれを感じるようにすること、ハートで知るようにすることが大事である。このとき自らの古いアイデンティティが消え去り、新しいアイデンティティがまだ発達していない空白状態に入り込む。このとき人は二元性を横に置き、自らの神性がやってくることができると通路を掃除するのである。そして自らの新しいエネルギー、自らの神性を感じ、味わう。そうして今度はその新しいエネルギーの中に入って行き、新しいアイデンティティへと跳躍する。新しいアイデンティティに跳躍すると、もはや「私は誰?」と自らに問い、答えを探すことはなく、ただ「我、在り」の気づきがあるのみである。もはや二元性はない(2002.6.1; 2002.12.8; 2003.10.4)<sup>19</sup>。

1999年12月13日に地球 地球のエネルギー が二つに分離した<sup>20</sup>。これはすなわち地球の意識が二つに分離したことである。これ以後から意識の量子的跳躍のときまでの間、二つの地球、すなわち新しい地球(新しいエネルギー)と古い地球(古いエネルギー)が同一の空間に並んで存在している。新しい地球はいま築かれつつある。それは地球人が自分自身の内部で起こしている変化によって築かれ

---

<sup>17</sup> 「我即神也」については次を参照。西園寺昌美『神人誕生』 白光真宏会出版本部 平成14年。

<sup>18</sup> 「我即神也の印」は身体動作、言霊の発声、本来の自分は宇宙神と俱にあるという想念・イメージが一つになったものである。詳しくは次を参照。 <http://www.inproject.org/>

<sup>19</sup> つまり、新しいアイデンティティ、本来のアイデンティティは「我は神なり」ということである。神性に戻るまでは自らの神性を探求して「私は誰?」と問い続け、さまざまな自分本来のものではないものに同一化してきたのだが、いまや本来のものに復帰し、神意識に戻ったのである。だから「我は神なり」と主語と述語に分離することもなく、あるのはただ無窮の存在意識「我、在り」のみである。

<sup>20</sup> 別のアセンション情報も二つの地球への分離について語っている。次を参照。

<http://www.crawford2000.co.uk/Photonessay.htm>。ここでは第3濃度(周波数密度)の地球と第4濃度の地球という言い方がされている。

ている。それとともにプレッシャーが高まってきている。変化に対する準備ができていようか、自らに問うプレッシャーである。そのプレッシャーを受けて人類が二極化しつつある。高潔な者はさらに高潔になり、混乱した者はさらに混乱し、闇の中にある者はさらに深い闇を求めていく(1999.12.11; 2000.1.15; 2002.12.8; 2005.8.8)。

意識の量子的跳躍以後、二つの地球はもはや並存してはいず、同一の空間にはない。新しい地球は古い地球のような惑星ではない。それはエネルギーの集積であり、物理的かつ非物理的な一つの別の場所、それ自身で一つの次元である(1999.12.11; 1999.12.31; 2000.1.5; 2002.12.8; 2004.1.3; 2004.10.2)。

新しい地球では人は純粋なエネルギー形態でいることもできるし、物質的形態を創造することもできる。たとえば自分の肉体を作り、その中に入り、他の人と食事を楽しんだり、性的に交流することもできる。新しい地球から古い地球へエネルギー的に行くことも意のままにできる(2002.12.8; 2004.1.3)。

新しい地球は宇宙的図書館のような役割を持つ。新しい地球にはすべての人間たちがかつて経験した体験全部が含まれている。それは古い地球上で持ったすべての感情、すべての想念、すべての感覚、全ての体験、すべての選択、すべての知恵を含んだ生きた図書館である。人間の形態の中にいたことのない天使たちが物質的宇宙にやってくる際、理解と学びを求めてそこを訪れる。(2004.5.1; 2004.6.5)。

新しい地球はまた、古い地球上における数多くの生涯で困難な人生を送り、そのためエネルギーのバランスを失った人々が、地球に再び戻る前に休養し、リハビリテーションをする場所でもある。(2004.6.5)。

他方、古い地球においても新しい地球におけるのと同様の変化が起こる強い可能性がある。古い地球においても二元性が放棄され、「我、在り」の理解が生じる可能性がある。それによってもはや戦いあう必要がなくなる。もはや肉体を持ち歩く必要もなくなる可能性がある。しかしまた、二元性の古いゲームを続け、「私は誰？」という問いの答えを探し続けたい魂たちの場所であるという属性も持っている。古い地球は戦争を続け、汚染を続け、不信を続け、怒りや憎しみや憤怒の感情を持ち続ける可能性も持っている。古い地球がどの方向へ行くかは現時点では地球人次第である。どうなるかは量子的跳躍のときに明らかになる(2002.12.8)。

#### 古い地球における輝かしい未来のために

上の「次元上昇に備えて」の節では、次元上昇を望んでいるが、しかし不安や恐れからまた3次元世界に投げ戻されたりしないためにはどういう準備をしたらよいかということ考えた。ところで、次元上昇することを目指してその準備ができていよう人の数はまだとても少ないようである<sup>21</sup>。その理由として、次元上昇ということが一般のメディアでほとんど報道されず、次元上昇という一大イベントを知らない人が多いことが挙げられる。一方、古い地球 トバイアスのような二つの地球への分離ということがあるとしてこういう言い方をしておく における経験をまだ重ねる必要があって今回次元上

---

<sup>21</sup> 小松英星によれば (<http://www21.0038.net/~gaia-as1/ongoing5.html>)、20万年前に地球上に「種蒔かれた」当初の人類は36,000本のDNAを持っていたが、時間の経過の中で種々の理由のためにそれらのほとんど全部が休眠し、現在ではたいていの場合わずかに2本から12本のDNAが活動しているだけである。世代間の連携によって地球人全体のアセンションを実現させるという戦略をとるなら、現世代の人間においては少なくとも3,000DNAの回復が必要である。小松は休眠DNAを目覚めさせるためにはアセンションを「意図する」ことが有効だとしているが、ここでもっと効果的な別の方法を指摘したい。西園寺昌美によれば、人間の肉体を構成するすべての細胞の中の一つ一つの遺伝子に「我即神也」の真理が刻印されているが、「我即神也」の宣言と印はその「我即神也」が刻印された遺伝子を速やかに目覚めさせることができる強力な手段である。遺伝子が完全に開花すると肉体は超感覚的な光に満たされた神的肉体に化すという(西園寺昌美「我即神也」の遺伝子、『白光』白光真宏会1998年11月号6-17頁参照)。この手段によってアセンションの成功に必要なだけのDNAを発現させることができるだろう。

昇を選択しない人が多いかもしれないということだろうか。さて、上に見たように、トバイアスは古い地球においても新しい地球におけるのと同様の変化が起こる強い可能性があるといっているが、しかしまた相変わらず二元性の古いゲームを続けていく可能性も指摘している。来るべき次元上昇の波に乗らずに古い地球、古いエネルギーの中に留まることを選択するのも自由だが、しかし古い地球の環境がひどく悪化していて、そこにおける生存が今後さらに困難なものになるだろうことが予想される。地球は本当にさまざまな仕方ですごく痛めつけられ、汚染されてしまっている。水が汚染され、海が汚染され、空気が汚染され、土壌が汚染され、食べ物が汚染されている。気候変動により地球における全般的な生活環境も明らかに厳しいものになりつつある<sup>22</sup>。地球人の手でそれを回復できると思うのは楽天的すぎるのではないか。そういう現実を直視すれば次元上昇を選択する人も増えるだろうと思われる。したがって地球世界の厳しい現状と次元上昇に関してもっと情報が提供されることが望まれる。それと同時に、古い地球に留まる人々のために、ここにおいても新しい地球におけるのと同様の変化が起こるためにはどうしたら良いのか考えなければならない。

以下、いま指摘した後者のことについて述べて本稿の締めくくりとしたい。テレビをつけて USA (アメリカ合衆国) のニュースを見るといつも「テロとの戦い、テロとの戦い、……」と溝の磨耗したレコード盤のように同じ言葉を繰り返している。「テロとの戦い」というまじない言葉、あるいは煙幕の下で何かのたくらみが進行しているのではないか。USA 政府機関が個人の通信を盗聴していることが最近問題になっているが、ごく一部の人間だけで全地球人を完全な支配化に置こうとするたくらみがあるようである。「テロとの戦い」で人々のプライバシーを侵害し、監視下に置こうとするのもその一環かもしれない。太田龍はイルミナティ 超エリート意識を持った一握りの集団で、彼らは世界を陰で操り、戦争やさまざまな災いを引き起こしているといわれる による「ニューワールドオーダー」の確立、すなわち全地球人に対する全体主義的・奴隸的支配のたくらみについてしきりに語っている<sup>23</sup>。そのようなたくらみとつながっているのか、USA 政府は高度の文明を持つ異星人の存在を隠蔽しているようである。そして UFO (未確認飛行物体) に乗って地球にやってくる地球外生物の存在を疑わせたり、あるいはそれが存在すると、それに対する恐怖心や敵対心を人々の心に植えつけようとする試みがさまざまな仕方で行われているようである。その理由は、全地球人の独裁的支配を目指す世界統一政府の実現にとって異星人の存在が邪魔になるからだとそうである。彼らは無敵の恐るべき兵器や技術を独占しており、いまや彼らが恐れる相手は異星人だけだという。飛鳥昭雄はこういうことを『完全ファイル UFO & プラズマ兵器』<sup>24</sup>で詳細に描いている。ただし、彼は「異星人」は地球内部の「亜空間」から

---

<sup>22</sup> たとえば次を参照。http://blog.mag2.com/m/log/0000101181. この他、現実となるかどうか判らないが、カルロス・パリオスはこれから 2 年以内にイエローストーン (USA ワイオミング州) の超巨大火山 (supervolcano) が大噴火を起こすだろうと見ている。注 13 参照。イエローストーン超巨大火山は 60 万年毎に噴火しており、最後に噴火したのは 64 万年前であるが、科学者たちは予見しうる将来に噴火が起るとは考えていない。イエローストーンのような超巨大火山が噴火した場合の規模は 1883 年のクラカタア火山 (インドネシア) や 1991 年のピナトゥボ火山 (フィリピン) などの噴火の規模の数百倍となり、それは地球環境に深刻な影響を与え、文明を危機におとしいれるだろうといわれている。次を参照。http://www.solcomhouse.com/yellowstone.htm. 一方、オーストラリアのモナシュ大学地球科学学部教授レイ・キャスは超巨大火山の一つであるインドネシアのトバ火山の爆発を警告している。トバ火山が最後に噴火したのは 73,000 年前で、その巨大噴火のため地球の気候が全く変わってしまったという (2005 年 4 月 1 日、AFP = 時事のニュース)。

<sup>23</sup> 次を参照。http://www.pavc.ne.jp/~ryu/cgi-bin/jiji.cgi. イルミナティなどについては次も参照。http://elbaal.hp.infoseek.co.jp/shi-gova.htm. なお、我即神也の真性を顕現すればいかなるものにも侵されることはないだろう。

<sup>24</sup> 飛鳥昭雄『完全ファイル UFO & プラズマ兵器』徳間書店 2005 年。ちなみに、イラク戦争時に使用されたある異様な恐るべき兵器も飛鳥が同書で詳述しているようなプラズマ兵器かもしれない。



来るのであり、実は彼らは行方不明になったイスラエル 10 支族<sup>25</sup>であると考えている。そのイスラエル 10 支族が間もなく全員再び地表に現われようとしている<sup>26</sup>ため、超独裁的な世界政府の樹立を狙う勢力は自分たちよりも高度な科学力をもつ彼らを抹殺しようとしているのだと飛鳥はいう。

飛鳥の主張とは違って、エイリアンは地球内部からだけ来るのではないだろう。地球人に敵対的なエイリアンもいるのかもしれないが、地球内部からのそれ 彼らは攻撃も、また攻撃に対する反撃の姿勢もまったく見せないようである も含めて、地球人を現在の危機から救い出し、次元上昇を助けようと思っている友好的な異星人もいるとしたらどうだろうか。たとえば村田正雄によれば<sup>27</sup>、地球世界の常識からは想像もつかないほど高度に発達した金星社会もかつては地球のように滅亡の危機に瀕していたのだが、他の星々から救援が来て、その指導のもとによりやく危機から脱出し、次第に高度の文明を築き上げていったという。ここで参考のために、円盤に乗って金星に行ったという彼が伝えていることを少し長くなるが引用したい。村田を円盤に案内し、金星まで同行した宇宙人 M はこういう。「金星とて地球のように何十億の年月を経て、荒廃の中から立ち上り、筆舌に尽きぬ苦難の時代を通り過ぎて、現代のような世界に迄昇華してきたのです。それは長い年月と金星人のたゆみなき努力の結晶でしかなかったのです。みる影もなきまでに荒れ果てた金星の苦難の時代は長く続き、もうこのままでは人類の住む天地に再び戻すことは出来ないと思えたときに、他の先輩星から救世主が現れたのです。透明に輝く白色円盤と眼を射るような強烈な光輝の放射に、誰一人としてその前に立ち向かう者はなく、多くの従者と共に金星の世界に降りて来て人の神性を説き、人の尊厳さを教え、荒廃した世界の救済のための素晴らしき智恵を授けられたのです。こうして次第に金星は昔日の姿に帰りゆくと共に、計り知れない智恵の力が人々の神性を開発してゆき、それと共に素晴らしい科学が育成されて、開発されてゆく神性と相俟って金星は大転換して現在の金星の姿になったのであります。」(189-190 頁)そして村田を金星に運んだ円盤の機長はこう語る。「金星が波動の大転換が行われて新生したと同じように、地球世界にも、大きな転換が起りつつあります。今は表面に現われておりませんが、これからは目を見張るような現象が現われてまいります。大神様の水も漏らさぬご計画が着々と進められているからです。地球の天位は大きく変わっております。果すべき役割が、徐々に多くの人達に自覚されてまいります。肉体人間の自我欲望の想念でよごれて、迷い続けて来た長い地球の歴史は終止符を打って、大きく本来の姿に還ろうとしているのです。[・・・]金星の科学は今に地球世界に移されてまいります。その時地球人類の想念世界に大混乱が起ります。自由主義も共産主義もない、地球より数等倍進歩した、計り知れぬ秀れた科学力を自由に駆使して、神々のごとき崇高な精神力を保持して、輝くばかりの活動を続けている星が数えきれぬほどある真実が、次第に分ってきて、その実態を知ることの出来る機器が地球人類の手に移された時、地球人類の想念は大きく宇宙に飛躍することでありましょう。」(309-310 頁)

いまの円盤機長の話は、かつて滅亡の危機に瀕した金星に他の星々から救援がやってきたように、地球にも現在救援の手が差し伸べられていることを語っているようである。ひどく傷ついた地球環境を地球人の力で回復させることは困難であり、また影の勢力による巧妙な操作・策略・抑圧・支配の仕組み

---

次を参照。 [http://www.2012.com.au/Super\\_weapon\\_Bagdad.html](http://www.2012.com.au/Super_weapon_Bagdad.html)

<sup>25</sup> 飛鳥は日本人はイスラエル 10 支族(エイリアン)の末裔である可能性があると言っている。そのためシークレット・ガバメントは日本人、特に皇室に異様な関心を持っているのだという。小泉改革は USA のさしがねだという意見もあるが、皇室典範改定の動きもそれと連動しているのだろうか。太田はこういうことについてもしばしば語っている。注 23 参照。

<sup>26</sup> 飛鳥によれば、イスラエル 10 支族は聖書や聖書外典に記されている預言に従って帰還するのであるが、同時に、地球磁場が消滅すると、プラズマ効果によって成立している地球内部の亜空間も消滅するため、地表に出てこざるをえないのだという。一方、飛鳥の説とは異なって、地球内部に住んでいる人類は 25,000 年前、レムリア文明壊滅のときに地底に逃れた人々だという説がある。次を参照。

<http://www.21.0038.net/~gaia-as/>「アセンション・オンゴーイング」第 4 回。

<sup>27</sup> 次を参照。村田正雄『宇宙人と地球の未来』 白光真宏会出版局 昭和 63 年。

をくつがえすこともなかなかできない<sup>28</sup>とすれば、地球人は彼らの隠蔽攪乱工作に惑わされないで地球外文明の存在を確認し、宇宙からの応援を求めべきである。トバイアスが見ている古い地球における明るい未来の可能性は地球人が高度に進化した他の星々からの応援を受け入れた場合に関連しているのではないだろうか。

そして実際、地球外の知的生命体と接触しようとする動きが最近大きく出てきたようである。カナダの元国防相ポール・ヘアリーはUSAが世界を宇宙人との戦争に巻き込もうとしていると警告している。ヘアリーは2005年9月、トロント大学で開催されたUFOなどに関するシンポジウムで演説し、その演説の中で、UFOは実在し、宇宙人がすでに地球を訪問し、地球人の動きを見守っていると主張した。ヘアリーはまた、宇宙人との遭遇に備えてカナダとしての独自の対応を行うための公聴会を開催するよう、カナダ議会に要請している<sup>29</sup>。

また、2005年12月16日には「コンタクトのための国連10年」の制定を求める決議がいくつかの非政府組織によって正式に国連に提出された。ポール・ヘアリーはこれを支持している。この決議は先進地球外諸文明との間に外交関係を樹立することを目指すもので、国連総会は約28年ぶりに再びこうした問題を討議することになるかもしれないという。約28年ぶりというのは、1978年12月18日にも地球外生命体に関する決議が行われたからである。このときの決議内容は、UFOも含め地球外生命体の存在について研究を行うよう国連加盟国に促すものだった。このときUSAだけが採択に反対し、他の国々にも反対するよう圧力をかけた<sup>30</sup>。

地球外文明との外交関係樹立を目指すこうした一層踏み込んだ動きは次元上昇のときが迫ってきたことと関連しているのであろう。地球社会が国連の場においてそうした事柄を検討するならば、地球人が全体として地球外存在と接触し、彼らを受け入れる姿勢が生まれてくる。そうでなければ地球外存在は公然と地球に降り立つことができない。なぜなら、他の惑星の問題に勝手に介入することは許されないというのが宇宙社会の原則だからのである<sup>31</sup>。

次元上昇のときには地球人と地球外知的生命体との大規模な接触があるのかもしれない。あるアセンション情報は、地球人と銀河連盟との接触は宇宙船の大量目撃で最高潮に達し、これと共に世界の統治構造は変わる、という。次のような壮大な内容のメッセージを読めば期待に胸が膨らむ。「地球人の中には地球を離れて他の星に出かけていくものもいるが、多くは地球に留まって地球の黄金時代を創造していく。地球は多くの銀河間の連盟の貿易や会議のための主要センターとなり、またその銀河間連盟の司令部所在地となる。[...]われわれの銀河連盟は銀河内の20万の文明を擁しており、これは銀河内諸文明の90%にあたる。この連盟が作られたのは400万年以上前である。銀河内における肉体的存在のおよそ60%はヒューマノイドの外見をしていない。[...]銀河連盟は太陽系内に1,800万機の宇宙船をいつでも揃えることができる。みなこの偉大な「終わりの時」(次元上昇：引用者による注)を支援するために互いに競い合わんばかりである。」<sup>32</sup>

(井上勉：博士(文学) 徳島文理大学教授)

---

<sup>28</sup> しかしイルミナティに対して、いまのような所業を改めなければ彼らの魂と生命流が完全に抹消されるだろうとの最終警告が創造の根源から発せられたという情報がある。次を参照。

[http://www.2012.com.au/Illuminati\\_notice.html](http://www.2012.com.au/Illuminati_notice.html)

<sup>29</sup> 次を参照。 <http://www.nikkanberita.com/print.cgi?id=200512090923565>。(日刊ペリタ 2005年12月9日)

<sup>30</sup> 次を参照。 [http://exopolitics.blogs.com/exopolitics/2006/02/proposed\\_un\\_dec.html](http://exopolitics.blogs.com/exopolitics/2006/02/proposed_un_dec.html)。USAは秘密裏にかつ排他的に宇宙開発を進め、宇宙における覇権を通じて地球における自らの絶対的優位を達成しようともくろんでいるようである。こういうことについては飛鳥の前掲書なども述べているが、次も参照。

<http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20060306301.html>;

<http://hotwired.goo.ne.jp/news/technology/story/20060307304.html>

<sup>31</sup> たとえば次を参照。 <http://groups.yahoo.co.jp/group/tatsmaki/message/99>。

<sup>32</sup> 次を参照。 <http://www.crawford2000.co.uk/goingon.htm>。